

高岡智空

挿絵／草上明

2DB
二重ドリーム・アート



性感
淫魔エステ2

EROTICUS ESTHETIC
BY SUCCUBUS GIRLS

權付けリフレはじめました

試し読み版

第一章 淫魔世界の生活、新しい仕事

第二章 温泉街のはぐれ淫魔

第三章 あかなめデトックス

第四章 種付けリフレ 伝授編

第五章 種付けリフレ 実践編

006

050

112

167

233

登場人物紹介



ルカ

和希が淫魔界で暮らしている屋敷で、家事を務めるメイド。ジト目、クールで毒舌、皮肉屋。人型を形成しているがスカートの下は……。



あかな 赤名めぐり

人間界にやってきた、JK風の淫魔。見た目は人と変わらないが、舐めることには本領を発揮。タメ口で言葉責めもお手のもの。



さくま 佐久馬 カレン

エステティックサロン「MONM」で和希に声をかけ、正妻として添い遂げることになった淫魔。



さくま 佐久馬 ルミナ

カレンの妹で、姉同様のエステティシャン。和希が大好き。

すどうじゅり 須藤珠理

和希が想っている、人間界で暮らす腐れ縁の女の子。

こしがやかずき 越谷和希

淫魔好みの精液精力を見惚れられ、すっかり肉欲生活に。

淫魔の協力を得たことで、大勢の女性からモテるようになった和希だが、その効果は珠理にだけは発揮されなかった。計画が頓挫したこと、珠理との関係が険悪になったことも手伝い、和希はしばらく彼女と距離を置くために人間界を離れ、彼女たちの住む淫魔界に移り住むことを決めた。

とはいえ、普通の人間にそのような提案がなされることはない。

和希の精力があまりに人間離れしており、いくら射精してもすぐさま補充される、淫魔たちにとって理想的なエナジータンクだったこと——。

精液自体も凄まじいエネルギー効率を秘めた、極上の餌だったこと——。

また、その味も類まれなる美味であり、最高級の嗜好品とみなされたこと——。

その他諸々の理由も含め、とにかく淫魔たちの強い希望があり、和希は淫魔界へ招かれることとなった。それを受け入れる決断は、もちろん和希にとっても重大なものではあったが、世話になった大恩あるカレンのためにと、覚悟を決めたのである。

(我ながら思い切ったもんだけど……実際のところ、いい場所なんだよな、淫魔界……)

人間界ほどの科学技術は存在しないが、それ以外の点では人間界とさほど差はない。住居や食事においても、最高水準のものが供されており、衣類を含め欲しいものがあれば、すぐに人間界に赴いて調達することも可能だった。

そしてなにより——性欲過多な和希にとってありがたいのは、この世界にいれば好きな

ときに、好きただけ、美しい淫魔たちとエッチできるといふ点だ。事情があり、一部の淫魔とのセックスだけは禁じられているが、それ以外の行為、それ以外の相手であれば、どんなプレイであつても希望が叶う。まさに、世界中がハーレムというわけである。

（珠理のことがなかったら、本気でこっちに骨埋めてるだろうなあ、俺……）

そう考えていると、夢に出てきた珠理の顔が、不意に脳裏をよぎつた。

（本当に、珠理とあんな関係になれるのかね……つて、いかん……思いだしたら——）

先ほどの凄まじい快感が股間に甦り、肉棒が軋むように大きく跳ねる。けれど、股間に感じた反応は、それだけではなかった。

「ふおうっつ!! な、なんか、ヌルッて……もしかして、夢精とか——くっつ!」

気がつくと、なにやら下半身全体がスースーとしている。太い血管を脈打たせ、躍動する肉棒は、熱くヌルついた感触に絶え間なく撫で上げられていた。さらには、包み込んで締めつける粘膜の柔らかさや、まとわりつく唾液の熱さ、混ざり合う精液の刺激までが、いまだに肉棒を捕らえて離さない。

（つて……これは、どう考えても……夢じゃないだろっつ!）

「——ぶじゅっ、ぐじゅっ、じゅるうううっ……んっ、ぷあっ……はああ……」

それが証拠に、布団の中からは、肉棒にむしゃぶりつくいやらしい水音が響き、下半身には人ひとり分ほどの重さがギュッと押し掛かっている。加えて——目の前の布団は、そ

の重さを感じさせる何者かが潜んでいるらしく、こんもりと盛り上がっていた。

「……………ていつつ！」

快感を堪えつつ、和希は布団を引つ掴み、勢いよく捲り上げる。そこでは一人の少女が股間に顔を埋め、一心不乱に頭を揺さぶり、ペニスをしゃぶり立てていた。

「んふうっ、れろっつ……べろおおっ……ぐぷっ、じゆるうう……んっ、んんっ……ぷはあっ、んちゅ……ろうひたのれふ、ごひゅじんひやま……むちゅっ、じゅばあ……」

濃桃色の舌を大きく伸ばし、ペニスを下から上へ、上から下へと激しく舐め上げる動きは、先ほどの射精を清めるためのものらしい。彼女の口腔や唇、舌はもちろん、ペニスの根元を挟む豊乳にもベツタリと白濁が絡みつき、青臭さを匂い立たせていた。

「そ、そこで、なにしてんだ……？」

「んえろっつ、べえろおおおっ……んうっ、ちゅっ……はああ……見ればわかると思いますが。この大きいだけが取り柄の早漏チンポを、ルカのおっぱいとお口で、お世話しているだけです——射精直後だというのにおっ勃たせて、本当に節操なしですね」

サラサラの銀髪を揺らし、エメラルドのように輝く碧眼が、半開きのジト目で和希を見上げる。褐色の肌と相まって、非常にエキゾチックな魅力を見せつける少女——ルカ。

年齢は和希より幾分か下に見えるが、彼女も淫魔であるわけで、実際は遥かに年上であることは間違いない。そのせいなのか、童顔ではあるが大人びた雰囲気があり、押し当て

られているその豊乳といい、ボディラインは非常に女性らしく整っている。小さくも肉厚な唇は、プルプルと瑞々しい若さを感じさせ、見ているだけで肉棒が硬くなり、軋みを上げて震えてしまった。

「ふぐうつつ……ル、ルカツ、お前またつ……こんなつ、勝手に——」

「ルカはご主人様のメイドとして、起床の時間を告げに来ただけです。そうしたらご主人様より先にご息がお目覚めでしたので、介抱していただけですが？」

こともなげに言い放ち、広がった舌腹で龟头を舐め上げる。その一瞬の刺激だけで、浮き上がった血管が大きく跳ね、尿道口が開き、彼女の口元にカウパーを散らした。

「まあ、射精したのは予想外——でもありませんか、ええ。これはとんでもない早漏チンポですからね。ご安心ください、ルカはすべて承知しています」

この世界に、この屋敷に来てからの和希の世話を、一身に引き受けてくれているのが彼女だった。もちろん、大部分は身の回りの世話ということになるのだが、専属メイドという立場がそうさせるのか、こうして性欲処理をされることも少なくはない。

ただ——それを彼女が望んでいるのかどうかは、和希にはいまだわからなかった。

「しゃぶりだして一分持たずに射精、それだけでも早漏認定だというのに——お掃除しているだけでガチガチにして、しかもこれ、またイキかけていませんか？」

ジト目で睨み、そう文句を口にした彼女が上半身を跳ねさせ、タプタプと揺れ弾む乳房

がペニスの根元を扱く。唇が音を立てて亀頭を吸り、溢れだした精液の汚れは、すっかり唾液のシャワーで洗い流されていた。

「本当に、どうしようもない早漏ご主人様ですね……せめてインスタントラーメンと同じ三分くらい、このマゾチンに我慢させてみせてはいかがですか？」

「っっ……はっ、ぐっっ……ンなこと、言われてもっ……くううっ……」

彼女はいつも、このように辛辣な口調で責めながら、様々な手段で精液を搾り取ってくる。和希の性癖がこういったマゾプレイに偏っていると、淫魔界中に広まってしまっているのも原因だとは思いますが、彼女の態度はそれ以前からこうだった。

こんな情けないペニスなど相手にしたくない——と言わんばかりの呆れた態度で、蔑みの視線を向け、ため息交じりに快楽を注いでくる。

「はあ……仕方ありませんので、二発目も搾らせていただきます。朝からメイドの口を、どれだけ汚すつもりなんでしょうね、まったく……ぶじゅっ、じゅれるお……」

ただ、その扱いと彼女のテクニクは、和希の性欲をこれ以上はしないほど、過激にくすぐってきた。乳肉の感触でペニスを叩かれ、尖った舌先に裏筋を擦られると、表情はたちまち緩みきり、和希は腕で身体を支え、腰を浮かせてしまう。

「はあっ、ぐううっ……で、るううっ……ルカっ、ルカあっ……」

「その甘えた喘ぎ声も、気持ち悪いです……黙ってイッてください、早漏」



淫魔界に行き、大きな屋敷を住居として与えられた和希に、カレンが世話役として紹介したのが彼女である。軟体動物のような触手を幾本も生やし、手足のように扱えるスキュラという種族で、他の淫魔たちより戦闘に優れているらしい。つまりカレンは、和希の護衛として彼女を傍に置いたということだろう。おそらく、今回の同行もそれが理由だ。

「ま、そりゃそうだ……とにかく、地道に捜すしかないよな」

「なるべく早く見つかってくれれば、私としてもありがたい話です」

先ほどのツンとした態度を崩さず、やはり淡々と彼女は答えた。

（うーん……こつちに来てから、余計に冷たくなつてないか？）

ルカのことはあまり詳しく知らないが、身寄りのない彼女をカレンの家が引き取り、淫魔としての教育を施したのだと聞いている。また、人についても学ばせるため、人間界で学校に通う手配も進めていたそうだ。カレンの妹であるルミナより十歳上、人間換算では一つ上ということもあり、そのお目付け役にするのも目的の一つだったらしい。

ただ、ルカ自身の願いもあつて、彼女は人間界には赴かず、引き続きカレンの家でメイドとして働いていた。それがなんの因果か、いまはこうして和希に仕えることとなつている。自分に当たりがきついのは、それが不服だからだろうか。

（やっぱ、カレンさんの実家に戻りたいのかも……確か淫魔の名家で、貴族みたいなもんで言つてたし。それくらい格式高い家の、メイドだったんだもん……）

いきなり現れた人間を突きつけられ、今日からこいつの家でこいつに仕える——そんな命令を受けたルカの気持ちを考えて、こちらも申し訳なくなってしまう。だからなるべく、彼女の手を煩わせないよう生活しているのだが、慣れない淫魔界暮らしで至らぬことも多く、また護衛のためもあり、彼女はいつも隣に控えていた。

そう——こうしている現在も変わらず、和希にピッタリと寄り添っている。

「……なあ、やつばもうちよつと離れたほうがよくないか？ ほら、俺は囧なんだし」

「お断りします。なぜその必要があるのか、ルカは理解に苦しみます」

そう答えたルカは、反発するようにさらに強く腕にしがみつき、その豊かな乳房の感触を、ムニムニと腕に味わわせてくる。そうして彼女が和希に密着すればするほど、周囲の好奇の視線は痛いくらい、二人に突き刺さってきた。

そもそも、周囲には浴衣の宿泊客が多いためか、メイド服の彼女は悪目立ちし、すでに大勢の目を惹きつけてしまっている。当然、そんな少女を従えている和希もまた、注目的となっていた。外国人の彼女にメイドコスプレをさせている、変わった趣味の彼氏——ルカのエキゾチックな外見も考えれば、周囲の感想は概ねそんなところだろう。

「というか——目立たなければ、囧の意味を為さないでしょう。ご自分がなにもせずとも女性の目を惹きつけてしまう、魅力的な外見だと思っっているのですか、ご主人様は？」

「い、いや、それはないけど……」

「それなら黙って従ってください。こちらはいまは、忙しくしているのですから」

彼女がそう囁いた瞬間、全身にヌルリとした感触が這い、和希はビクンツと全身を跳ねさせて反応する。当然、すれ違った観光客が何事かとこちらを見やるが、和希は誤魔化すように顔を伏せ、羞恥に耳を熱くすることしかできない。

「ル、ルカツ……もうちよつと、て、手加減をつ……あぐつつ、くううつ……」

「できかねます。そもそも、手加減ではありませんが、お射精は我慢させているではありませんか。ちよつと気持ちいいのくらい、適当にやり過ぎてください」

「そ、そうは言っても——おおつつ！ ほおつ、はっ、あああつ……」

繋がれた手の平から、ルカの温かな体温と蕩けるような濡れた感触が伝わり、絡み合う指がニチャニチャと扱かれた。その刺激だけで快感に身を震わせながら、和希は反論もまともにできず、歩きながらみつともなく膝を揺らしてしまふ。そんな和希の姿をチラリと横目にし、彼女が大きなため息をもらした。

「はああ……ですがまあ、これだけご主人様が快楽に弱いのは、むしろありがたいことです。その調子でエロい匂いを撒き散らして、しつかりと囿になってください」

「うう……はい、努力します……」

捜索のために現地入りしたのは昨日だったが、その夜は珍しく、ルカから搾精行為を受けることはなかった。それもすべては今日の調査のため、禁欲半日で熟成された精臭をし

つかりと漂わせ、淫魔を惹きつけることが目的なのだという。

そして——その濃厚な精臭を匂い立たせるため、和希の全身はいま、ルカの伸ばす触手にほぼ隙間なく絡みつかれていた。

(やっ……ばいっ、これええっ……気持ち、よすぎいいっつ……くふううっ！)

媚薬効果もあるらしい、彼女の甘い体液を分泌する触手が、表面についた吸盤で隙間なく肌に密着している。指に絡みつくのと同じ、ヌルりと生温かい感触——それがグチュグチュと音を立てて腕に巻きつきながら、衣服の中に艶めかしい滑りを広げていた。

繋いだ手から伸びる触手が、袖を潜って身体を這い回り、腋や首筋、胸元、下腹部——脇腹や腰、そして太もも、さらにその下へビッシリと根を張っていく。歩くたびに、その濡れた感触が全身を締めつけ、切ない快楽を流し込んできた。誰かに舐められているような感覚が、常に全身に浴びせられ、膝の震えと喘ぎが止まらない。

「チンポの反応だけで淫魔は引き寄せられますから、声はださなくていいのですよ？ そのアへ顔と喘ぎ声は、周囲の人間に、ご主人様に変態だとアピールするだけですから」

「そ、そんなっ、ことっ……い、言っつて、もっつ……」

柔らかく熱い吸盤が唇のようにむしゃぶりつき、ジュルジュルと音を立てて肌を擦り上げる。動かされなくてもその有様だというのに、触手はルカの意思一つで自由に蠢き、身体中を容赦なく這い回って、媚薬体液を塗り広げていた。無数の舌で舐め上げられるよう

な刺激に、触れた箇所は熱を孕み、股間のはち切れんばかりに屹立させられる。

「いいと言っているのに声を上げて……なんですか、見られたいのですか？ 全身ペロペロされて、大勢の人間が見ている前でアへ顔晒して、パンツの中にドっピュンおもらししてしまいたいのですか？ とんだ露出狂の変態ですね、ご主人様」

「っ……な、なに言ってるんだ、ちが——ふっつ、んくおおっつ……」

淡々としたルカの言葉責めにも快楽を煽られ、肉棒が大きく脈動し、先走りの塊が勢よく吐きだされた。その瞬間、SMプレイの荒縄のように全身に絡んでいた触手は、一斉にピタリと動きを止め、吸盤だけがチュウチュウとキスマークを刻んでくる。

「まあ——射精させてしまっつては台無しなので、おもらしはさせませんが。それにしてもご主人様、恥ずかしくないのですか？ 従えるべきメイドに射精のタイミングまで完璧に管理されて、早漏チンポの手綱を握られてしまっつているのですよ？」

言い訳のしようもない、現状を冷静に解説する言葉に、激しい羞恥が込み上げた。

「本当にご主人様は、節操のないダメチンポをお持ちです……ズボンにまで恥ずかしい染みが広がっていますよ？ 透明の恥ずかしいおつゆで、パンツの中クチュクチュです」

「そ、それは、お前がっ……うくっつ、ああああっつ！ やめっ、それええっ……」

柔らかな触手が、亀頭の先をツンツンと突く。尿道口を穿る刺激に、たまらず肉棒が大きく跳ね、快感から逃げるように腰が引けてしまった。けれど、身体中を這い回る触手は

下半身全体を縛り上げ、尻の谷間にまでキュウツと食い込み、情けなく引けた腰を無理やり突きださせてくる。膨らみきつたズボンの股間が晒しものになり、すれ違う人がしつかりと目を向ければ、その激しい勃起状態は簡単に見て取れるほどだ。

「ほら、ちゃんと餌チンポを見せつけて、強調してください。僕はこんな街中で、歩いてるだけで勃起してる惨めなチンポ持ちですって、恥ずかしい染みを晒すんですよ」

触手の先端が肌に粘液のラインを引きながら、硬く尖り勃つ乳首に吸いつく。小さな吸盤が口を開き、ヌルついた感触で乳首を包み、扱くように吸り上げた。

「男のクセに、乳首までガチガチに勃起させて……餌食にしてくださいって、全身で懇願してるんですか？ とんでもないド変態ですね、ご主人様という存在は」

——ズジュツツツ……グジュルツツ、又チャア……クチュウツ、ジュルルウウツ！

「あつぐううつつつ!! んいつつ、ひいつつ……ひぐつつ、あつ、はあああつ……」

尻谷間に食い込む触手が何度も往復し、腰を浮かせてくる。同時に、噛みつかれた乳首もクイクイと上向きに引き上げられ、甘い快楽電流が身体中を駆け抜けた。

目も眩むような衝撃がパチパチツツと火花を散らし、自然と上体が反り返り、股間がこれでもかと突きだされてしまう。思わず歩みを止めそうになるが、乳首に啜えついた触手が身体を引っ張るせいで、脚は震えながらも前進せざるを得ない。主人でありながらメイドにリードを結わえられ、犬の散歩のように引きずられてゆく——その倒錯した官能が、肉

棒をさらに硬く膨らませ、太い血管を幾筋も脈打たせた。

「まさかとは思いますが……犬扱いをされて、悦んでいるのですか？」

そんな声が耳元へ滑り込み、和希はビクツと身を竦ませる。嘲るような調子ではなく、淡々とした調子だけでもない、彼女にしては珍しい、驚きを孕んだ声の響きだった。

(いまの、声ええ……うくつ、ふうつ……本気で、呆れて、るっ……ような……)

そんな彼女の様子を確認することが、怖くてたまらない。それでも好奇心に負け、彼女の顔を振り返ると——碧眼は驚愕に丸く見開かれていた。その目はやがて、冷たい輝きを纏い、信じがたいものを見たというように、顔全体がしかめられてゆく。

「——このマゾ。呆れますね、想像していた数百倍もマゾだったなんて」

(くうああああ——つつ!? こ、この目、本気いつ……あぐつ、やばああっ……)

短く囁かれる冷え切った言葉に、全身がゾクゾクと震えた。脈打つペニスは絶え間なく先走りを滴らせ、触手の吸盤に音を立てて吸い上げられる。射精を導くには至らない、龟头だけを丁寧にしゃぶる触手フェラの快楽に、腰の痙攣が止まらなかった。

「犬扱いがお望みなら、今後は屋敷内でも全裸に首輪をつけ、四つん這いでお散歩させてあげましょうか。真面目に働くメイドたちの前で無様を晒し、跪いて足掃除をさせてもらってはいかがです？ きつと喜んで、罵倒の言葉をプレゼントしてくれますよ」

二の腕や太ももが、絡みつく触手にニチャニチャと抜き立てられ、刺激とともに彼女の

言葉が食い込んでくる。羞恥のイメージが快感を伴って膨らみ、脳内では勝手に、メイドたちの声による侮蔑と忍び笑いが再生されていた。

『ワンワン散歩楽しいでちゅかあ?』『足の裏で、頭撫でてあげまちゅね〜』『ちゃんと舌伸ばして、舐めなさい』『指の間ペロペロ……あはっ、惨めでちゅねえ♪』

幼児に話しかける、ペットに話しかけるような言葉づかいで蔑まれ、蒸れた素足で顔や舌を踏み躪られる——そんな妄想が被虐の快楽を迸らせる。心地よさに肛門がヒクつき、ジンと熱い痺れが突き抜け、腸壺の奥が得も言われぬ感覚に圧迫されるようだった。

「……あーあ、妄想してしまっただのですね、ご主人様。顔が完璧なマゾ顔になっていますので、バレバレですよ……犬扱い妄想で、ますますチンポ硬くなっていますね」

ルカの囁きに、肉棒が弾けるように震え、開ききった尿道口がカウパーを垂れ流す。ズボンをパンパンに膨らませるその肉塊だけが唯一、触手の蹂躪を受けていないといつてもいい。触手は下腹部や太ももにグルリと巻きつき、絶え間なく舐め擦る刺激を与えてくるが、先ほど軽く先端を突いたきり、肉棒にだけは決して触れてこなかった。

だが、そのことが逆に和希の興奮を昂ぶらせる。まともに触れられたわけでもないのに、男として恥ずかしい全身の性感帯を撈られ、開発を進められ、それだけで射精してしまいそうになっている事実。それを脳が理解し、刻みつけられるたび、ペニスは激しい空撃ちを繰り返し、透明の牡汁が溢れだして下着を濡らした。

「ズボンの染みが、恥ずかしいくらい大きくなってきました。散歩中におしっこもらした
って思われてしまいますね、ご主人様……ほら、すれ違う人が笑っていますよ」

「そ、んつつ……な、わけえ……ふぐつ、あつ、マジッ……くうつつ……」

否定しようとした瞬間、女性二人でやってきたらしい、浴衣の観光客と視線が合っ
てしまふ。誤魔化す暇もなく、涎を垂らした恥ずかしい表情を見られ、燃え上がる羞恥に股間
がビクビクと躍動していた。そんな和希を笑いながら、二人の視線は舐めるように身体を
這い下り、下半身へ向かう。そして――。

「うわ、めっちゃ勃起してる……♪」「す……く……ふつ……デカすぎ……♪」

膨らみきった股間と、黒々と広がった染みを見て、彼女らは淫猥に唇を歪めた。思わず
血の気が引く和希だったが、そんな感情とは裏腹にズボンの中の弩張はさらに激しく暴れ
回り、下着の中に新たな淫汁を吐きだしてゆく。

（やべっ、これ――ふ、普通の人に、見られっ……あつ、んんうつつ!!）

慌てて股間を隠し、足早に歩き去ろうとするが、ルカの触手がそれを許さなかった。

「――なにをしているんですか、逃げてはいけません。見せつけないと、ご主人様がどれ
だけおいしそうなマゾ牡なのか、わかってもらえないではありませんか」

ここぞとばかりに、張りつめた肉棒の裏側を根元から先端まで優しく、触れるだけの感
触でゆっくりと舐め上げる。全身を愛撫するのと同じ、柔らかく蕩けた生温かな刺激――

それを肉竿に味わわされ、和希の全身は絶頂寸前のような反応を示してしまった。

「はあぐつつ、あつつ……んくつつ、おつつ、ほおおつ……おああつ……」

爪先がピンと伸び、股間を突きだし、一步も歩くことはできない。括約筋までがキュツと引き締まり、窄まった菊皺を触手の吸盤に吸いつかれ、無数の細かな触手にしゃぶられるのを感じる。ねちっこい肛門舐めに頭が痺れ、ガクツガクツと腰を暴れさせながら、和希は彼女らの前で痴態を曝けだしていた。

「ぶっ……なんかエロい顔してるゝ」「わざわざ止まって、見て欲しいのかな？」

囁き合い、すれ違う時間を目いっぱいに使って、好奇の視線が和希を見つめ続ける。自分から溢れる淫欲のフェロモンが、周囲の女性をも淫らな心境にさせる——そんな効果も幾分か手伝っているのかもしれない。頬を紅潮させた二人はじつくりと股間を眺め、それから再び、和希の蕩けた顔を見つめ、濡れた唇を小さく動かした。

『へ・ん・た・い♥』『さ・い・て・い♥』

「~~~~~つつつ！ あはあつつ、はつつ……おつつ、ふううつつ……」

わかりやすい唇の動きで、その罵倒の言葉を味わわされ、熱く火照った全身に大量の汗が噴きだす。それがまとわりつく触手に絡みつき、粘りついた水音が耳をくすぐり、肌を吸り上げた。ズルリ、グチュリと軟体のロープが身体を撫で回し、尻谷間を前後に滑り、腰を突き上げさせようとする。そして和希はそれに抗えず、女性の視線が見つめてくるの

を自覚しながら、何度も腰を跳ねさせ、染みの広がるズボンの股間を突きだしていた。

「……あゝ、おもしろっ♪」「あれイッチャったかなあ、イッてたかもねえ♪」

女性らが囁し立てて笑いながら、和希の後方に歩き去っていく。その声に耳を痺れさせられながら、触手で舐め回される快感に包まれ、身体の痙攣が止まらない。

「危うくおもらししてしまうところでしたね、ド変態様——いえ、ご主人様」

フツと耳元に息がかかり、耳朶が小さく舐め上げられた。それだけで鼓動が大きく跳ね、達してしまいそうなほどに肉棒が震え、快感電流が迸る。その反応を見て、ルカはすぐさま触手愛撫を緩やかにし、完璧な射精コントロールを披露しながら囁く。

「彼女たちが淫魔なら、あつさりと食いついていたでしょうけど、残念ながら違ったようです……つまりご主人様は、普通の人間に無様な姿を晒したということですね。盛りのついた牡犬の散歩姿、見られて馬鹿にされた気分はいかがですか、気持ちいいですか？」

「やっ、めつつ……んぐつつ、くいっ……いつ、いま、言うなあっ……ふううつつ……」

主従の逆転したお散歩プレイ、露出羞恥——そして全身愛撫。

凄まじい肉悦が四肢の末端に至るまでを蕩けさせ、感度は極限まで高まっていた。そんな和希の身体を、柔らかく温かな触手は這いずるだけでなく、吸盤を唇のように開かせ、その奥からさらに細い触手を伸ばしてくる。蛇の舌のように、チロチロと蠢く細い触手が丁寧な腋をしゃぶり、臍穴を舐め回し、そして乳首を叩き、捏ね潰す——。



快感に身体が震え、崩れた身体はますます布団に沈み、尻房が自然と持ち上がった。めぐりの鼻先に尻穴を押しつける格好になるが、彼女は気にした様子もなく、むしろ積極的に顔を擦りつけ、口を押しつけてくる。敏感な窄まりを唇でなぞられた瞬間、ゾクゾクウツと甘い電流が走り抜け、膨らみきった肉棒がまたも尿道を緩ませた。

「あはっ、またもれた……こんなので感じちゃうなんて、変態のマゾ牡だけだよ？」

「透明の雫が、勃起チンポの先から垂れ落ちて、布団に染みを広げていますね」

「ひぐつつ、うううっ……い、言うなあっ……あんつつ！ うぐつ、くううっ……」

めぐりの嬉しそうに弾んだ声、ルカの淡々とした声が、先走りをもたらした格好悪さを指摘してくる。そうして羞恥を煽られれば煽られるほど、身体の火照りは増すばかりで、浴衣を羽織っただけの全身は、水でも浴びたように汗でびしょ濡れだった。

「ここもさあ……脚舐めてあげてるだけなのに、さつきからヒクヒクさせちゃって……指でして欲しいの？ それともお……舌で、ペロオーってされたいわけ？」

彼女が指摘するのはペニスではなく、牡の快楽器官として最低の恥辱を味わわせる、不浄の肉穴のほうだ。そこに吐息を吹きかけられるたび、彼女の言葉通り、肉皺は激しく収縮させられ、あるいは緩み、呼吸するように忙しなく反応してしまう。

「あははっ、また悦んでる♪ ほんつと、自分で言ってたみたい——ド変態のマゾ野郎なんだね、和希は……淫靡に苛められないと興奮できない、恥ずかしいオ・ス♥」

「んぐつつ……おつふおおつつ!? ほやつつ、そやああつ……ひぐううつつ!」

尻穴が唇と重なり、たつぷりの唾液を絡められながら、激しく吸い立てられる。肛門が盛り上がるほどの吸引に腰が震え、肉棒が跳ね、全身がガクガクと暴れるも、触手とめぐりの手で押さえられた身体は、その場から動くことはできない。

「んつつううつつ……ぶちゆううつつ、ぶえろおおつつ……んえろつつ、ぶえろおおんつつ……んふうつつ、んえろつつ、れるううんつつ……はあつ、んむちゆうつつ……」

唇で尻穴を塞がれたまま、伸びた舌がくねって脚を包む。それぞれの指の谷間までがベロベロと舐めしやぶられ、まるで大勢の女の子が集まり、舐め奉仕をしてきているかのような、まさに夢見心地の快楽――。

「ほやああ……もつほ、こえらひていいよお……んーん、こえ、らげやなくうう……あふえええつ、んえろおつ……かうぱーもお、いっばいらへええ……れろおおんつつ……」

ペニスの先からは、糸でも垂れ下がっているかのように、先走りが途絶えることなく伝っていた。と――その受け皿になるように、舌が蝸局どくろを巻いて杯を作り、なおも舌先は上半身のほうへ伸びる。溢れだした汗をピチャピチャと舐め取りながら、指でたつぷりと颯られた乳首へ到達したそれは、隙間なく密着し、先ほど以上の肉悦を胸元へ送らせた。

「ふぎゆうつつ! なんつ、これええつ……すごつつ、うううつつ! 尻つ……つてか、脚いいつ……いっばい、舐めてんのにつ……乳首までえつつ、んあああつつ!」

「んっ、はああ……ほんつと、エロい声……ふふっ♥ 身体中舐め回されて、女の子みたいな声でアンアン鳴けっ……もつと気持ちよくなりなよっ、このマゾ犬♪」

「はああっつ、うううっつ……あ、れ……なんで、声ええ……うくううっ!？」

唇も舌も奉仕にかかりきりだというのに、彼女の声がクリアに響いてくる。そのことに驚く和希にクスクスと笑いを浴びせながら、今度は舌先を耳にまで這わせてきた。

「ああ、これもあかなめのテクニクだよ……口を塞いでても、舌であちこち舐めてても、声を聞かせられるの……舐められながら言葉責めされるなんて、いままで経験したことないよねえ？ 頭ン中バカになっちゃうくらい、辱めてあげるから♥」

そう囁き、舌先が耳をピチャピチャと舐め回し、涎を擦り込んでくる。その一方で、乳首は無数の舌にむしゃぶりつかれたように、グルグル巻きに包まれ、ギユウギユウと押し潰されていた。舌が滑るたび、乳首も乳輪もたつぷりと擦られ、熱い痺れが溢れだす。

一メートル、二メートルなんてレベルではない。本気で伸ばせば十数メートルになるのではと思わされるほど、長くしなやかに伸びた舌が、全身を余さず舐め蕩かしていた。溢れた汗が吸り取られ、代わりに唾液がたつぷりと浴びせられてゆく。そこを舌で念入りに擦られると、泡風呂の中で身体を洗われているような感覚に捉われた。

「んっふふふ……ね、お風呂入ってるみたいでしょ？ もしくはサウナかな……身体の内深あ〜くから、よくないのが溢れてる感じ……舌で擦られてるの、わかるよねえ？」

言われるうちに、火照った身体の首筋や耳の裏側、緩んだ腋の下にまで、ドプウツと汗が噴きだすのを感じる。それらも含め、身体にこびりつく皮脂汚れまでが拭われ、ジュルジュルと音を立てて吸い上げられていた。密着した肛門も吸いしやぶられ、舌の付け根が肉皺を圧迫し、隙間を押し広げ、尻穴を掻き回そうと蠢いてくる。

「あつ……ひいつ、んうつつ……そ、れええつ……はふううつ、んぐつつ……き、汚いですからあつ……やめ、へつつ……ふつぐううつ、んおおおつつ……」

「汚くないよ、和希の身体……ふふふ、もつとださせてあげるからね。汗も垢も、トロットロにして溢れさせて……全部食べちゃうから……んえろつつ、じゅれるううつ……」

身体の一部で舌がぐねり、吸盤のような形を成し、それが肌にもしやぶりついた。溢れだす汗が吸られる——というより、身体の奥底から汗や老廃物が吸いだされ、根こそぎ剥ぎ取られていくような感覚——それが、めぐりの舌や手で撫でられるたび、快感とともに膨らんで、狂おしいほどの淫熱が全身を包む。

「これね……あかなめの手とか舌で擦ると、こうなるの……デトックスっていうんだっけ？ 相手が人体じゃなくても、そこにこびりついた老廃物とか、浮かせて吸いだせちゃうの……こういうのも、あかなめ族にとってはご飯になるからね……んっ♥」

浮かんだ汚れはめぐりの体液に包まれた瞬間、水につけた綿あめのように淡く溶け消え、舌を伝って彼女の口腔へ吸い上げられているようだった。

「……ねえ、こういうのって、汚いと思う？ 嫌だったら、やめとくけど——」

「い——嫌じゃないっつ！ ですつ、全然っ……めちゃくちや、気持ちいいっ……」

不安げな声でめぐりが問いかけた瞬間、和希は即答する。その声の大きさに驚いたか、めぐりの舌がビクツと跳ね、ズルリと音を立てて巻き上げられる——その刺激が身体中を這い回り、快感に蕩けた肉棒から、またもたつぷりの先走りが滴り落ちた。

「ふぐっつ……んっ、おおっつ……い、嫌、どころかあっ……そんな、エロいことおっ……身体中、舐められるの……すげえ、興奮しますっ……あぐううっ……」

快感に腰がガクガクと震え、尻房が自然と持ち上がってしまう。唇に吸い立てられる肛門はさらに激しくヒクつき、それを舌で弄られる刺激に煽られ、ペニス射精のような躍動を何度も繰り返した。それだけの快感を味わっているながら、和希はめぐりの奉仕を絶賛し、さらなる快楽を求めて尻穴を突きだしてゆく。

「め……めぐりさんが、汚いって思わないならあ……もっと、してくださいっ……」

男として最低の、そんな恥ずかしい反応を見せる和希の姿に、あかなめ令嬢はクスクスと嘲笑をもらして、上擦った声を耳元に響かせてきた。

「……汚いトコ舐められて、そおんなに興奮するなんてさあ……ほんつとに、どうしようもないド変態だよ、和希は……ふふっ、いいよ♥」

折り畳まれ、クリップのように耳朶に吸いついた舌が、唾液をたつぷりと塗りつけ、耳

全体を扱き上げながら嘔きかける――。

「和希の全身……あたしのご飯にしてあげる♥ 涎で身体中ベトベトにして、あんたの体臭、あたしの匂いで塗り替えて――嗅覚に覚え込ませながら、射精させちゃうから♥」

「んひゅっつ、ほおっつ……ひよおつ、らっつ、こっ……ろ、んっおおおっ……」

イヤホンのように首筋を這って、舌が左右の耳を包み込み、ジュルジュルと舐めしゃぶっていく。フリーになった先端は顔中を舐め回し、鼻の穴にまで唾液を注ぎ込んで、言葉通り、彼女の唾液の香りが嗅覚を蹂躪してきた。人間の唾液臭とはまるで違う、甘い花の芳香を思わせる、淫らな匂いが鼻腔を突き抜け、脳髓をドロドロに煮溶かしてゆく。

流れ込む唾液は鼻穴から喉へ流れ込み、胃へ滴り落ちるのだが――それが触れるや、腹の奥底がカアツと熱くなり、頭の中が真っ白になるほどの快感が迸った。

（なっつ……んんんううっつ!! はあっ、ぐっつ……なんだ、これえっ……もしかして、なんかまずいやつじやつ……うぐっつ、おおおっつ……）

ドクンドクンと鼓動が早鐘を打ち、活性化した血流が、一斉に股間へ注ぎ込まれる。肉棒は太い血管を幾筋も浮かせて張りつめ、射精じみた勢いで先走りを撒き散らした。

激しい興奮に戦慄していると、めぐりの声が耳奥に伝わってくる――。

「ふふっ、熱くてたままないでしょ……あかなめ族の唾液って、人間の身体のどこよりも清潔で、どんな淫魔の体液よりも媚薬成分が強いんだよね……」

「ひよ、ほお……んむっ、じゆるうっ……そおっ、なんひゅ、かあ……んむっ……」

その清潔な特濃媚葉が塊のように乗せられた舌が、真つ赤な表面をくねらせて唇を舐め擦り、口腔へズリと滑り込んだ。水飴か蜂蜜かというほどの粘度と甘さが、搦め捕られた舌全体に塗り広げられ、際限なく喉奥へ垂れ落ちてゆく。

「汚れもせくんぶ舐め取ってるけど、すぐにエナジーになってるから……舌だつて、すっごい綺麗なんだよ？ 媚葉でできた、食べられる石鹸みたいなものつて言えば、わかりやすいかな……毎朝あたしとキスすれば、歯磨きもできてお得だから♥」

(なにそれ、すげえ！)

そんなお得情報に驚いている間にも、彼女の口撃は和希の五感を責め立てていた。

「んぶじゅっつ、じゆるううっつ、ちゅばっつ、あむううっ……んっはああつ、れるおおっ……ずるっつ、じゆるるううっつ……はあつ、むちゅっ、れつろおおっ……」

「おむっ、んぐううっ……おおっ、溺れ、りゅっ……んぐっ、ふああああ……」

身体中を這い回る舌に触覚が犯され、口内を舌と涎で完璧に満たされ、聴覚には舌のくねる水音しか聞こえない。五感のほぼすべてがめぐりに支配され、息苦しさから思考が震まされるのに、下腹部の疼きと射精欲だけはこの上なく昂ぶつてゆく。

(やつっ……ば、いつっ……くうっ、うおおっ……これっ、出るううっつ……)

身体が勝手に射精準備を始め、尻穴が舌を噛み締めるように窄まり、みつともなく腰が

突き上がってしまった。物欲しげな、男の尊厳を捨てた和希の反応に、めぐりが笑う。

「んふうっ……手だけでも十分だったけど、舌も使っちゃったせいかな……もう頭の中まで、トロットロみたいだね？ お尻振っておねだりなんて、ほんと、やらしいんだから……これにハマっちゃったら、もう忘れらんなくなるよ、いいの？」

グチュウツ……と舌の表面に新たな唾液が溢れ、尻穴や乳首、耳の穴がドロドロにかさされていった。肛門は大口を開いて舌を飲み込み、滑らかな挿挿を浴びせられ、迸る肉悦にペニスがはしたなく何度も跳ねる。

「ま——忘れられなくなったら、毎日お風呂でしてあげるよ……一日分の和希の汚れ、隅から隅まで、ぜんぶん舐め取って……モグモグチュウチュウって、搾ってあげる♥」

囁きに合わせ、密着した舌腹が、身体の内側を舐め、彼女のエネルギーにされてゆく。吸われた箇所がジンと熱く痺れ、またも汗と垢を吐きだし、彼女のエネルギーにされてゆく。

「一日溜め込んだ、いやらしいのも、ね……こうやって、吐きださせてあげるから♥」

イタズラっぽく笑い、声を弾ませたかと思うと、めぐりの舌が緩やかにくねって尻穴を穿り、前立腺へ優しく唾液を塗り込んだ。なんといいことはない前立腺へのマッサージであり、カレンたちにもよくおねだりをしては、嘲笑されながらゆつくりと擦り抉られ、甘い快感の波を味わわせてもらう、恥辱の肉悦なのだ——。

「お——あつ、ぐつつつ、うううつつつ!! なんつつ……あつつ、はあああつつつ!!」

——ビュゲンツツツ……ブビュツツ、ドプツツ、トポオオツツ……ドロオオオツ……

いま味わわされた心地よさは、それらと比べ物にならない、高純度の快楽だった。

めぐりの舌にひと舐めされただけで、和希の我慢を嘲笑うように、肉棒の先端から大量の白濁が押し込まれてしまふ。勢いのある、いつものような射精ではない。ヌルヌルと押し込まれ、垂れこぼれるような、みっともない性欲のおもらし——それでも、尿道を駆け抜ける刺激には変わりがなく、和希は全身を跳ねさせ、絶頂の悦びに浸ってしまう。

肛門はギチギチと軋むほどに締めつけられ、折り畳まれて捻じ込まれた、少し厚みのあるめぐりの舌を何度も甘噛みし、扱いて、腸奥へ飲み込もうとヒクついていた。

「あはっ、出た出たあっ♥ 前立腺ペロペロされて、我慢できなかったねえ……でも大丈夫だよ、和希が早漏だったのはよくわかってるから♪ チンポ扱かれなくてもお手軽にもれちゃう、情けなしい射精で、あたしにザーメン搾ってもらおうね？」

囁すような笑いを耳元に浴びせられても、下半身を完全敗北させられた証、屈辱のおもらし射精は止まってくれない。肉悦とともに溢れる白濁は、亀頭の前で待ち構えていた舌の杯で、一滴たりともこぼすことなく受け止められてゆく。

「おふつつ、おつつ、ほおおつつ……んあつ、な、なんでっ……ひぐううつつ！」

「なに驚いてるの、トコロテンくらいされたことあるでしょ？ まあ、ここまで早くもれちゃうとは思わなかったけどね……ぶっ、くふっ……クスクスッ……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>